

これまで「そうじ」(そふじ、そふち、そふぢ)という言葉に着目して「おふでさき」を見てきた。ここで総括しておきたい。

一号から順に見ていくと、まず、どのような状況で「心のそうじ」が求められているのかに気づく。それは差し当たって、親神の眼からみて相応しい人材配置が促されているときといえる。たとえば、一号や二号では「やしきのそうじ」という表現を用いて、ある人を「やしき」から他家に送り出すという状況で「心のそうじ」が求められており、その逆に、三号では人々の芯になるべき人を「やしき」に迎え入れることにおいて求められてもいる。また、それは人の動きだけではなく、三号では不要な建物を取り払うことにも関係しており、さらに八号や十六号においては「ぢば」を定めて「甘露台」を据える為にも人々の「心のそうじ」がなされなければならないと歌われている。総じていえば、七号に「だんだんとつとめを教えるこの段取りにおいて、胸の内よりみんな掃除する」と歌われているように、「心のそうじ」が求められる状況とは、「つとめ」を通した「世界たすけ」の段取りが進められていく状況だといえよう。

それでは、そうした「心のそうじ」は誰に求められているのであろうか。七号では「銘々の“うち”の話や」と述べて、身内や家内という人間関係におけることとして論されている。他方で、四号ですでに「うちも世界も隔てない」と歌われているように、その対象は「うち」に留まらず、広く世界中の人間であるともされている。たとえば、十七号では「高山でも谷底までも」世界中の人間の「心のそうじ」をすと述べられている。「心のそうじ」は身近な人間関係から広く世界中の人へと求められているといえよう。

次に、親神はどのようにして人々に「心のそうじ」を促すのであろうか。三号では、神が「ほうき」となり「不思議な働きを現すこと」によって「心のそうじ」を促すと述べられており、また十二号では親神が「世界(の心)を見定めて」、「各々の心をみんな現す」ことによってであると示されている。その際、「心のほこり」は身の上での病気や、事柄の上での困り事となって現れると告げられる。すなわち、四号では「どのような“痛み”や“悩み”や“できもの”や、あるいは“熱”や“下痢”など、すべては「ほこり」(が原因)である」と歌われている。そうして現れる事柄は必ずしも人間にとって都合のいいものではないが、親神としてはそうした方法を取らざるを得ないのであり、たとえば、十四号では「どのような辛く切ない事があっても、それは単なる病ではなく、親の残念の現れである」と述べられ、また、十七号では「このそうじをどういう事に思っているのか。たすけばかりを思っているから」とその切なる思いを吐露されている。

ところで、こうした「親神がどのようにして」という問いは、「我々がどのようにして」それが可能なかを理解することにもつながる。実際、我々の一番の関心は、どうすれば我々自身が「心のそうじ」に参加出来るのかということであろう。「おふでさき」では、「心のそうじ」の実現が示される時、多くの場合「ひとり出来る」という表現が用いられている。たとえば十二号の79で、「世界中の者はこの先をたし

か見ていよ、むねの掃除がひとり出来るで」と示されており、また、171・172では「銘々の心を身の内にどのような事でも確かに全て現すから、これを見たらどんな者でも心底むねの掃除がひとり出来るで」、同様に、十五号20・21でも「さあ今日ではどんな者でも真のむねの内を確かに現すから、これさえ全て現したならばむねの掃除がひとりできるで」と歌われている。これらの歌から推察すると、「心のそうじ」とは、自分の本心(胸の内)が自分の身の回りに現れてきた事柄(病気など)に映じていると自覚できたときに果たされるといえる。言い換えれば、内側の働きが外に現れたとき、あるいはより厳密に言えば「内側の働きが外に現れた」と内側で感じられたとき、「心のそうじ」がおのずと実現されていくのである。

そして、親神はそうした「内側の働きが外に現れる」のは、親神の働きによるものであると告げている。そこで、ここではそうした親神の働きを「呼応の理」と呼びたい。つまり、「内側の働きが外に現れた」ことの実感、親神の「呼応の理」への納得であるといえる。ところで、「おふでさき」を読めば、そうした「呼応の理」の現れ方には、人間が「切なさ」(苦しみ)を感じる場合とそうでない場合とがあるように解される。そのため親神は「内側の働きを外に現す」と述べつつも、現れてきた事柄で人間が切ない思いをすることが気の毒な上から、そうした事柄が現れてくる前に「呼応の理」を実感できるように言葉を尽くしている。こうした親神の伝え方は差し当たって「呼応の理」とは別の働きと考えられるから、ここでは、そうした親神の伝える働きを「伝達の理」と呼びたい。それは親神の働きを伝えるための働きともいえるべきものであり、「おふでさき」そのものがその一形態とも考えられる。

さて、「心のそうじ」は、親神のこうした「呼応の理」と「伝達の理」によって促されていくと解される。我々は、みずからの心の働きが身の回りの事柄として現れたとき、親神の「呼応の理」を感じながらみずからの心のあり方を反省する。そのプロセスにおいて、「心のそうじ」は「おのずと出来る」。そして、親神はそうした「心のそうじ」を念じつつ、我々の心のあり方に応じて事柄を現す(呼応の理)。ところが、親神はその前に、まず「そのように伝える」ことで我々に「心のそうじ」を促されてもいる。つまり、親神は事柄を現す前に、我々の納得の程度に応じて言葉を現す(伝達の理)。

そこで、「心のそうじ」とは、その媒介が「事柄」か「言葉」かの違いはあっても親神と人間の心が通じることで果たされるのではないかと考えられる。十三号23に「心さえ真実に神が受け取れば、どんなほこりもそうぢするなり」と歌われているのは、親神と人間の心が通じることが「心のそうじ」そのものであることを示されているのではないだろうか。こうしたことを考えると、「心のそうじ」とは、第一に、親神の言葉に耳を傾けることから始まると思われる。というのも、たとえそれが耳痛い話であっても、親神は事柄の上で「切ないこと」が現れる前に、言葉の上で「むごいことば」(「みかぐらうた」十下り目六ツ)を現していると考えられるからだ。